



The Salamander  
in  
the  
Circle

第二十九章 ベレオーサ市の惨劇

峯村 明

Salamander in the circle

### 第二十九章の登場人物

ダーヴェ	……	ネウトラ評議会・学術調査団の団長	上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員	民族・言語学者
ヤスウ	……	学術調査団の団員	
マミヤ	……	ホシナ族の娘	
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子	
コモラ	……	前総督バンテオラの顧問	最高賢者
メンドルブ	……	メッサナの化学者団の代表	
シバド	……	アンベレオのメッサナ先遣隊長	
ドゥル	……	シバドの兄	ベレオーザ家当主
レガリオ	……	アンベレオ王国の国王	
ソルド	……	ケストル闘技場の警備隊長	

### これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長	マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻	
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち	
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長	ゴン	ホシナ族の男	(ヤサカオ族出身)	
	ヴァリス将軍	レルの父	サノヒコ	王に仕える役人		
	カール	王子	ヘルガの弟	フツスシ	王に仕える者	将軍
	ロウナス	国務省の高官	アンテロ	レルの副官	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	摂政	亡国王の弟	ヘレガ	王女	チドリ	アマセオの妻
	ハムツ	チドリの義父	タマシギ	ハムツの息子	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者	コタエ	"	スクナ	"
ケストル王国	パウル	国王	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟		
	ウルリク	第三王子				
	ヘンリク	ウルリクの息子				
	ホベオク	ケストル人の美女				
黄金門市	皇帝	皇帝	バンテオラ	メッサナ市の総督		
	パソネル	バイスロイの参謀	メルノ	音楽家		
			バルダリス	メッサナ総督家の一人	臨時総督代理	
			バラム&バランケ	双子のジャガー	バンテオラの部下	
冥界	冥界王	冥界の王				
	ベネトナシュ	死神				
	テクトリ	最下層ミクトランの主				
	プラトニオ	メッサナを追放された化学者				

## 目次

### ベレオーサ市の惨劇

443.

444.

445.

446.

447.

448.

449.

450.

451.

452.

453.

454.

455.

456.

第二十九章のあとがき

back number

奥付

## ベレオーサ市の惨劇

443.

『嘆き悲しんでいるむすめをみて、王さまは慰めてやろうと思い、歌いました』

物語にはそうある。その時の王さまの気持ちがわかるような気がする、とヒューダーは思う。とはいえ、かの王のように歌を詠んだり歌ったりする才を、彼は持っていなかった。そこで彼は、立ち上がってむすめのところへ行って、となりに腰かけた。

ただの昔話じゃないか。

おまえが泣くことはない。

そう言えない。ヒューダーは愕然とする。物語はまだ続いている。現在進行の形で。おきさきが産んだ子も、指輪も実在する。しかも指輪は巡り巡って『彼』の手に。

ヒューダーは問う。この物語において、オレにはなにか役割があるのだろうか。そして——物語の行く先は……結末は……

大量の民話、説話、昔話を頭に詰め込んでいなかったら、『彼』の正体に気づくこともなかっただろう。そうだった、まるで無関係に見える話を重ね合わせることによって、『彼』の正体に気づいてしまったのだった。民族学など学ぶのではなかった。詮無

いことと知りつつ、ぼんやりとそんなことを考える。

いや、しかし。どうして『彼』と出会ってしまったのだったか。『彼』がマミヤを慕っていたからだ。マミヤゆえにオレは『彼』と出会い、名前までつけてしまったのではなかったか。

マミヤは『彼』、イリチャを弟か何かのように思っている。

『彼』が、祝福されなかった結婚から生まれた祝福されない子だと知ったら。祝福されない理由が、『彼』が災厄を意味するからだを知ったら。

それ故に、神なる存在は彼を円環の内へ閉じこめたのだ。

#### 444.

バイスロイは新総督シパドに求婚され、ヒューダーは図書館でマミヤと語りあっているころ、ヤスウはコモラとメンドルプ、ふたりの老人と語りあっていた。

(なんで俺だけ相手が年寄り?)と本人は少々ぶぜんとしているが、片や元総督の顧問にして最高賢者、片や世界最高峰の頭脳及び人格者集団の代表者である。猫に小判的な取り合わせではあった。まあ、本人には内緒である。

メンドルプはあらゆる称号や栄誉を剥奪され、着の身着のまま、何も持たず、『化学者の館』をたったひとり、追い出された。

アンベレオの先遣隊は人の尊厳、人の気持ちについてまったく無頓着だった。彼らはひとりで古巣を出て行く老人に対して嘲笑を浴びせ、食べかけの食物を投げつけたのである。

そのことは逆に、メンドルプを奮い立たせた。

「アンベレオはわしひとりを脅迫し、追放して事足りりと考えているようだ。彼らは化学者の価値を理解していない。それどころか化学者を舐めている。『化学者の館』がアンベレオの思いのままになるとしたら、大間違いだ」

長い人生の中でこれほどの屈辱は初めてだったメンドルプは、屈するどころか闘志を燃え立たせた。それを見てコモラはあとでヤスウにささやいた。

「人の上に立つ者は、かくあるべきだという見本のようなお方だ」

「でもさ、大丈夫なのかい？ けっこう参ってるように見えるんだけど」ヤスウは声をひそめてささやき返す。

「そりゃあ人間だもの、ダメージを受けていないわけがない。それをおもてにだそうとしないところがご立派なのだ」

ヤスウの胸中には、メッサナへ来る前に立ち寄ったネウトラ・ポリスでの祖父母の姿があった。ダーヴェたちの情報からすると、アトランティス大陸のほとんどが壊滅した様子だという。大陸の北東の端にあるネウトラ・ポリスはそもそも爆心地、祖父母が無事なわけがなかった。旅立つヤスウを心細げに見送っていたふたりの姿がメンドルプに重なってしまう。また、ポリスにはメンドルプの兄だか弟だかにあたるハイヤーン博士がいた。そのことに思い至ると、胸がつぶれるような気持におそわれるのだった。

そんなヤスウの気持ちを知ってか知らずか、メンドルプはヤスウを手招きする。

「きみの仲間の一行に、評議会の人間ではない、ちょっと毛色の変ったのがおったな」

「バイスロイさんですか？」

「そう、彼。彼の一族はある使命を帯びておる」

「……なんですかそれ」

「人類が危機に陥った時、彼らは人々を導く。特殊な使命を負った一族なのだ」

「へ……え……」

「彼らは現身（うつしみ）の金星神を祖先にもっているゆえに。金星神とは、真に人類を導く者」

「ホントですか」

ほかの人間のいうことならまゆつば物だが、メンドルプでは真実味の方が大きいと感じるヤスウである。

「彼自身何故次々と事件に巻き込まれるのかわかっとらんだろうが、それは彼に流れる血のゆえだ。だから……彼を見た時、わしは、おそらくそうじゃなかろうかと思った。つまり……地上にいた多くの人間は、無事だ。地表は汚染されたかもしれんが人間はおそらく無事だよ」

「————」

「黄金門の一族にはそうする使命があるのだ」

メンドルプは詳しく語ったわけではないが、“多くの人間”は爆発に巻き込まれなかった、ということらしい。封鎖されたメッサナにいるかぎり、確かめようがないことではあるし、ならば彼らはどこにいるのかという疑問が発生するのだが、祖父母やハイヤーン博士は無事かもしれないという可能性はヤスウの気を楽にさせたのだった。

445.

豪華なイスに腰かけさせられたバイスロイは呆然としていた。目の前で若い女が着替



えをしている。侍女たちが群がり、それまで身に着けていたものをすべて取り去り、真新しい下着に換え、その上に純白と青の衣装を重ねていく。

バイスロイ自身、髪も鬚も整えられ、女と同じ色合いの衣装を身に着けていた。気恥ずかしいばかりにお揃いの衣装である。いつの間にこんなものを着こんだのか、まったく記憶がなかった。ただ、少しずつ目が覚めてきた感じがある。女の着替えはゆっくり行われている。まるでバイスロイに見せつけているかのようだ。だが、若々しく張りつめた金色の裸身を見せつけられたところで、バイスロイにはなんの感慨もわかなかった。むしろ気持ちが冷たく凍りついていくのを感じる。そんな意識はあるのだが、体の自由はきかない。たった今立ち上がることも目をそむけることも文句を言うことも、できないのだ。

(一服盛られたか、あるいは……)

シパドはなんらかの、サイキカルな力をもっているのかもしれない。あのヘビのような目で凝視されると身がすくむように感じるのは気のせいではなかったのだろう。バイスロイは内心舌打ちした。

(私ともあろう者が。こんな女にひっかかるとは！)

そしてふと思い出すのはケストル王国へ赴いた際、すれ違ったヘルガの様子だ。心ここにあらずの放心した態で虚ろな目をしていた。のちに再会してみればその時の彼女が異常な状態にあったということがよくわかる。

(王女は同じ攻撃を受けたということだろうか)

ヘルガに強力な暗示をかけたのはケストル王だったが、その力の発現はシパドのそれと非常によく似ている。両者が似たような力を持っていたというより、共通する源を持っていたのだ。その源泉と通じる波長を有する者は力を呼びこみ、発現させることができる――

いつの間にか、眼前に立った女が冷たい目をじっと当てていた。高く張り出した胸が目の前にある。女は言った。

「時間だ。参るぞ」

446.

「おいおいおいおい！」

ざわつく人混みに混じって、ヤスウは口から出る言葉を止められない。「あのおっさん、あんなとこでなにやってんだ!？」

ヤスウにとって自分より年上の男性はみな“おっさん”である。それでいくとダーヴェもヒューダーもそう呼ばなければならないが、彼らに対しては恩と義理があるので名前だけで呼んでいるだけである。しかしバイスロイには今のところ恩も義理もないから、“おっさん”呼ばわりなのだった。

「見ろよ、お揃いだぜ！ お・そ・ろ・い！！」

ようするに、新総督就任のお披露目にメインバルコニーに現れたバイスロイへの言葉だったのだ。

ダーヴェとヒューダーをちらりと見やれば彼らも同意見なのは一目でわかった。あんなところでもなにをやっているんだ？

彼らはそんな感想を押し隠して周囲の反応を観察している。

総督府前の広場に集まったのは元の住人たちである。その人々からは……歓呼の声ひとつ上がらなかった。ざわざわざわざわ、不穏なざわめきが拡がって行く。

新しい支配者は若く細っこい娘。見るからに小娘だ。

女王のごとき資質と貫禄とを具えたパンテオラを見慣れてきた市民にとっては得も言われぬ衝撃だった。

栄光のメッサナはこの女によって滅ぼされたのだ！！

ぞくっ、と、ダーヴェは背中に悪寒が走るのを感じた。

いくらなんでもアンベレオはやり過ぎた、そう思った。住民がなにを思い、どう感じるか、考えないのだろうか。

アンベレオにどんな理屈があろうと、ここまで住民感情を逆撫でするとは。

住民にどんな非があろうと、彼らに対して何をしてもいい、そんなわけがなかった。

暴動が起きる。

それがダーヴェの直感だった。

#### 447.

しかし、ベレオーサ・シパドは住民ごときの反応を気にかけるような、やわな神経を持ち合わせていなかった。それどころか、「観衆はあたしの姿に驚き、言葉を失っているのだ」、そうバイスロイに話しかけた。嬉し気に。

バイスロイはそれは当たってると思った。その通りだ、と。だがこの雰囲気からわからないのか？ おまえに好意を抱いている人間はおそらくひとりもないぞ。

シパドは観衆の雰囲気もバイスロイの冷たい視線もどこ吹く風、なにやら嬉しそうにそわそわしている。

お披露目に関してはバイスロイはまったく蚊帳の外だったから、バルコニーに引き出されたあと、何が行われるのかまったく知らないのだが、シパドの様子からするとなにやらイベントがあるようなのだ。

いやな予感がした。シパドの考えることがまともだったためしがない。

(いったいなんだ——なにを企んでいる——)

ざわり、と、空気が動いた。お披露目に集まった観衆は全員、一人残らず、その空気を感じた。全員の目がいっせいに同じ方向へ動く。

総督府の建物の正面に、まるで広場のような道路がまっすぐ、延々と、南へ向かっている。その道路の果てから、何かが来る。

シパドはあきらかにそれを待っている。

(なんだ——?)

何かが来る。総督府への一本道を走ってくる。観衆は潮が引くようにざあっと退き、場所を空ける。

バルコニーはそうとう高いところにあるから、バイスロイの目には遠くから人が走ってくるのは見えていた。ひとりではない、複数、十人くらいはいるだろうか。彼らは——みな男だった——異様な表情で懸命に走っている。なにかに追われるように。

何が男たちを追っているのか。それを知った時、バイスロイは心底驚愕した。

(バカな——そんなバカな——！！)

信じられなかった。

男たちを追っているのは、巨人だったのだ。

#### 448.

心底驚愕したのはヒューダーも同じだった。走ってくる男たちに見覚えがあった。特に、先頭の男。蒼白に歪んだ顔面を汗まみれにしているあの男は、忘れもしない、ケストルの警備隊長ソルドではないか！

続くのはミクトランから彼に同行してメッサナへ移動したはずの面々だ。その彼らが、巨人に追われている——

なぜ！？

ヒューダーは反射的にバルコニーを仰いだ。そこで目を輝かせている瘦身の小娘を。はたしてバイスロイは関与しているのか。しかしこのような光景を目の当たりにしてバイスロイは異様なほど表情のない顔を彼方へ向けていた。新総督シパドとはあまりに表情が違い過ぎた。何かしら、精神に制約を受けているにちがいないとヒューダーは思った。

その時、ぎゅうっと腕を掴まれた。ダーヴェだ。

「アレに見覚えがあります」、とダーヴェはつぶやくように言った。「東方の大陸の、山岳地帯にいた個体です。間違いない」

ダーヴェの頭の中には世界に数ヶ所あった居住地の巨人の情報が入っていた。たとえば世界の果ての島のダイドラボッチはそのうちの一体である。

「ミクトランの巨人族繁殖計画は“あの男”によって無くなった。アトランティス大陸に侵攻していた巨人族は放射能雨によって全滅。しかし、そう、ダイドラボッチのようにまったく無傷な個体もいるではないですか。彼らは地上から完全にいなくなったわけではなかったのですよ！！」

ヒューダーは掴まれていない方の手で、つま先で背伸びしているマミヤを引き寄せた。

「見るな、見てはいけない！」

「どうして？」

ヒューダーは怒鳴った。「見るなといってるんだ！！」

「な、なんなのよ！ いきなり！ 怒鳴らなくたって——！！」

それは壮絶な見ものだった。巨人は一本道を走って逃げる男らに追いつき、両手を振り回して彼らを次々と脇へ跳ねのけた。そして最後にソルドだけが残った。ソルドはよろめく足で総督府のピラミッドの基底部にたどりつき、絶望的な目で狂おしく上を見上げた。無限に空に向かって続く階段を。両腕を掲げる様は救いを求める動作にほかならなかった。だが……救いは来なかった。

449.

シパドは足元で繰り広げられている惨劇を笑ってみていた。いかにも楽しそうに、いかにも、生き生きとした様子で。そして、「バイスロイ」、と話しかける。

「そなたの話からそなたの祖国を割り出した。そはケストル王国なり」くくくくっと含み笑い。

「すでに妻が十人いる？ 破産するほどの罰金？ くにの法律？ それがどうした。あたしにはこんなことを実行に移す力がある。力の前にひれ伏すがいい。そなたもな」

バイスロイに恥をかかされたシパドのお返し。ソルドたちケストル人はその犠牲となったのだった。

450.

「ヒューダーー」

気を失っていたマミヤは泣きながら目を覚まし、傍らにいたヒューダーにしがみついた。

「どうして？ ねえ、どうして？ どうしてどうしてどうしてどうして！！」

狂ったように泣き叫ぶマミヤの背を撫でさすしかできない。

どうして？

その疑問はヒューダー自身、さらに、ソルド自身、彼の仲間たちのものでもあっただろう。そして誰も答えられない。

(いけ好かない連中ではあったが……)

緩いとはいえ、ケストル軍の規律のもとで職務に就いていた者たちだ。好奇心ゆえにミクトランくんだりまで出向いてしまい、生き抜こうと試行錯誤し、ついに黒ジャガー・バラムの跡をつけて自力でメッサナへ脱出するのに成功したらしい。

(彼らは生きようとしてミクトランを出た、その結果が、これか！？ どうして!?)

まさかバイスロイがシパドを振ったからだとはさすがのヒューダーも考え及ばない。まさに……新総督シパドの所業は想像を絶していた。

事前の通告が何一つなく、恐ろしい光景を見せつけられて動転したのはマミヤだけではない。総督就任のお披露目にはさまざまな人々が集まっていた。男も女も、老も若きも、こどもも。彼らが負った心の傷は……比べるものがなかった。

(支配者による被虐待……)

ダーヴェは唇を噛みしめて体を震わせた。

#### 451.

その晩。シパドが鼻歌まじりで湯あみをしている時。

誰も近づいてはならぬと人払いされた一画の奥まった部屋、バイスロイの前に訪問者



が現れた。

訪問者はバイスロイに目顔でうなずき、両手の指を使って複雑な印を結んだかと思うと、ついと歩み寄り、彼の頭を両手の平ではさんでその額と、己の額とを触れ合わせた。

火花が迸るようなショックがあった。頭の中を走査され、猥雑なものを根こそぎ引く抜かれる、目が覚めるようなショックだった。周囲の分厚い水の壁のようなものが消え去り、感覚が鮮明になり、バイスロイは文字通り目を覚ました。

「そなたは——コモラどの！」

老いた訪問者は、しっ、と唇に指をあてた。

「お静かに。時間がございませんゆえ。バイスロイさま、このような強力な魔法をかけられるとは、災難でございましたな」

「魔法！ あの女はやはり魔法使いか！」

「いかにも。ベレオーサ家の者はサイキカルな力をもって人の心を操作し、縛るので。己の思い通りに」

「油断した！ 私ともあろうものが！」

「どのような魔法であろうと、人間がかけたものならば、このわたくしに解けないものはございません。ご安心なされませ。さ、わたくしめとともにここを出ましようぞ」

はた、とバイスロイは相手を見返した。

「ここを出る？」

「いかにも。わたくしはそのためにやってまいりましたのです」

「ここを出る？ いや、それはできん」

「なにを仰せになる——」

「そなたも見たらう。今日の惨劇を。あのおぞましい光景を。何故あんなことがなされたのか、私は知っている。首謀者は総督・シパド、彼女の口からはっきり聴いた。去る日、私は彼女から求婚された。私は即座に断った。本国に妻が十人いる、それ以上持つと莫大な罰金が課せられる、本国にそういう法律があると虚言を弄して。その話からシパドは私の本国とはケストル王国だと割り出した。惨劇の餌食になったのは全員ケストル人だった」

「つまり——意趣返しであったと？」

「さよう。じつに……私もだが……くだらん！！ くだらなさすぎるわ！！ あの惨劇の発端は、そんなことなのだぞ！！ 私がてきとうな出まかせを口にしたばっかりに——！！」

「だからといって、バイスロイさま、だからといって、シパド姫の要求を受け入れるおつもりか！？」

バイスロイはきっぱりと頭を打ち振った。

コモラは立ちすくんだ。これだけ明確に拒否されてなお、シパドはこの男を縛る気だったのだ。ベレオーサ・シパドがこういう人間だとアンベレオが知らぬわけがない。

このような人間に、先住者のいる土地を治めさせようとはいったいどういうつもりなのか。

「このくだらない茶番を終わらせねばならない。私は……そうすべき責任を作り出してしまった」

452.

「コモラどの、茶番はこれだけではないのだ」

バイスロイはコモラの衣をつかみ、せかせかと、陰鬱に言った。

「アンベレオが出した通達を覚えておられるか。市内に滞在中の外国人や旅行者を、国王の行幸まで優遇するという、あれだ。アンベレオは、シパドは恐ろしいことを企んでいる。外国人や旅行者は、生贄にされるのだ」

「——は？」

「生贄にされるのだ！ アンベレオが信奉する“神”が生贄を要求しているのだ！」

「まさかそのような——神が？ 生贄を要求するなどと——」

コモラは顔を引き攣らせた。

かつて神なる存在は、人間に道を指し示し、間違いを正し、多くの技術をもたらした。その最たるものが例の転送システムである。神は人間と共に生きた。そう伝えられている。神への供儀は花と果物、音楽だった。

「じ、冗談はおやめください、そもそも貴方は神の末裔たる黄金門を継ぐお方、そのような発言は問題ですぞ——なんだってまたそんなことを——」

コモラはしどろもどろだった。彼の数百年の人生が覆されるくらいの発言だったのだ。

「信じられないのは私も同じだ。ただ、アンベレオの神とは、我々の知らない神だ」

「————」

部屋の外で人の声がする。

「それからもうひとつ。私はアンベレオの王都へ連れていかれ、イリチャに会った。アンベレオは彼のプロフィールを刻んだ金貨を世界中にばら撒くつもりだ！！」

いきなり部屋の扉が開き、逃げそこなったコモラは泡を食って物陰に隠れる羽目になった。

入って来たのは初老の男、執事で、かなり慌てていた。

「バイスロイ様、突然申し訳ございません、じつは、本国から緊急の召集がございました」

緊急の召集というからには、すぐに来いということだ。

「バイスロイ様もすぐにお仕度を」

緊急の召集とやらでシパドはえらく気分を害していたし、執事も侍女らも大慌てだった。おかげで、バイスロイにかかっていた魔法がきれいさっぱり無くなっていたことに誰も気がつかなかった。

#### 453.

ベレオーサ家当主・ドゥルは大変な怒りようだった。昼間のシパドの所業が国王の耳に入り、王宮に呼びつけられたドゥルは大叱責をうけたのである。

「まったく、おまえのおかげで赤っ恥をかいたわ！！」

ドゥルは妹の顔を見るなり大声でまくし立て、分厚い水晶製のグラスを投げつけた。シパドはすいっと身をかわし、グラスはバイスロイの顔面を直撃した。バイスロイの額が切れて血が流れたが、ドゥルもシパドもおかまいなしである。

シパドは澄まして言った。「レガリオはなんと？」

「陛下とお呼びせんか！　いつまで幼馴染気分でいる気か！」

「あんな男、レガリオ坊やで十分だ。あたしより三つも年下だし」

「そういう問題ではないわ！　おまえというやつは、国王という立場、社会的立場というものが理解できんのか」

ドゥルはうんざりした口調を隠しもしなかった。彼はベレオーサ家五兄妹の長兄、シ

パドは末っ子でただ一人の女だった。そのため、彼女は幼少時に一族から手放しで可愛がられ、甘やかされ、どうしようもなく増長し、そのうえ兄たちから疎まれるという育ち方をしたのだった。

「かの巨人は新興国から我がベレオーサ家へ贈られた献上品だ。巨人をそのように扱うことはネウトラ評議会が禁じておったのだが、やつらは自滅してしまったものだから、捕らえることも移動させることも可能になったのだ。あの珍獣を使えばどれほどの利益が生まれることか！　ところが、おまえがバカなことをしてくれたおかげで王宮で大問題になった。総督就任のお披露目を血で汚すとはな！　巨人は王家に取り上げられたぞ！」

金儲けのタネを取り上げられたことを憤慨しているのだった。それからドゥルは思いつく限りの悪態で妹を罵った。バイスロイとしては罵倒されるかわいそうなシパドをかばってやろうなどという気はまったくなかったが、さすがに気分のいいものではなかった。

こっそりため息をついていると、ドゥルの照準が代わった。「その男は何者だ」

「あたしの夫だが」

これみよがしの大きなため息とともにドゥルは言った。

「おまえなあ、自分がベレオーサ家の人間だということがわかっているのか？　わかっていないようだから言って聞かせてやるが、どこの馬の骨だかしれん者をだな、ベレオーサ家に入れるなど許されんのだぞ。だいたい、外国人ではないか。これ、そのほう、名前は聞かぬ、たった今、さっさと立ち去るがいい」

ベレオーサ家当主のお言葉に従い、バイスロイはひとことも発することなく、さっさ

と部屋を立ち去った。執事が先にたち、門の外へ送り出した。なにしろ、当主のお言葉は絶対だったから。

バイスロイは自分の命令しか聞けないと思いこんでいたシパドは、信じられない思いで“夫”が自分から屋敷を出て行くのを見ていた。

#### 454.

実家に打診もせず身元不明の男を良人として公の場に連れ出すとは、妹ながらおバカにもほどがあると、本日数えきれないうんざりに襲われるドゥルであった。

——コイツは世界は自分を中心に回っていると信じて疑わない。兄がこうして道を正してやろうにも、おおかた逆恨みされるのが関の山だ。できるものなら関わりあいたくもないが、旧メッサナ統治は王家の勅命、従わぬわけにはいかぬ。

だがなあ。コイツのせいで虎の子の巨人を取り上げられるわ、『化学者の館』は王家の直轄となるわ。

これは今宵言い渡されたばかりだが、ベレオーサ家の領土内に王家の直轄地ができてしまったのだ。コイツのことだからそれを知ったら大癩癩を起すに決まってる。まあ、総督就任のお披露目で外国人を巨人に喰わせるなどという弩級のショーを披露した報いなのだが、コイツにそれがわかるだろうかなあ。

ああ。いやだいやだいやだ。だれか私の立場を代わってくれんものだろうか。

あ、そうだ、さっきの男。

結婚させて、独立させてしまえば責任を押しつけられるではないか！ 追い出したのは早計だったか？ いや、だが、わけのわからん外国人を招き入れたと、一族の長としての私が責められるにきまつてる。

メッサナ攻略の前に誰か適当かつ無難な男とむりやり結婚させておくべきだったのだ！

ああ！ 悔やまれる！

それもこれも、『導く者』のせいだ！ 巨人を使えば絶対儲かる。あなただけに教えてあげる。絶対、誰も思いつかないもうけ話だなどと、うまいこと言いおって！ 肝心なときに雲隠れしおって！ 中途半端な導きのせいでこんなことになったんじゃないか！！

ドゥルはひとりで恐怖に青ざめたり、憤怒に赤くなったりしていた。妹も妹なら兄も兄である。

そんなベレオーサ家であったから、『導く者』、すなわち、死神ベネトナシュが入りこむのも容易だったのだ。

そんなベレオーサ家であったから、旧メッサナ奪還記念硬貨に見ず知らずの少年が刻まれていると知っていたのは、シパドだけだったのである。そのシパドも心はバイスロイに夢中になっていたから、まさかではあるが、ことの重大さに気づけなかったのだ。



455.

深夜にもかかわらず、レガリオはバイスロイの訪問を喜んで受けた。芸術家としての通行証をとっさに隠し持ってきた自分をほめてやりたいバイスロイである。さもなければ路頭に迷うところだったが、通行証にはレガリオの特別のサインが入っていていつでも城内に入ることができた。王のサイン入り通行証などよくあるものではない。彼は信用できる友人としてバイスロイを見ていたのだった。

つくづくアンベレオは一枚岩ではないと実感する。層の厚さを感じるのだ。いい意味ではなく。

バイスロイは、シパドからは求婚されて束縛され、シパドの兄からは拒否されて放りだされたことを包み隠さず打ち明けた。するとレガリオはぼつりと、「災難であったな」とつぶやいた。彼にとってもベレオーサ家は厄介な存在らしい。

「曾祖母がベレオーサ家の出なのだ。ご本人はいまだ元気でおられる。ベレオーサ家が強気なのはそのためなんだよ」

ベレオーサ家とはもともと地方の豪族にすぎなかったという。レガリオの曾祖母という女性が王家に嫁いでから急激に力をつけ、中央へ進出してきた。

『ご本人は元気』ということは、心身が健やかであるという以上に、なんらかの権力を握っているということなのだ。権力は二重どころか三重にも四重にも存在する。その全容はおそらく誰も知らない。アンベレオはまさに闇の王国だった。

レガリオは手ずからお客の額のケガを手当てした。客が恐縮するほどのかいがいしさで。

「いやいや、ドゥルもシパドも、することがストレートだからなあ、ケガを負わせたま

ま帰らせるとは。それも、私の友人に。私から失礼の詫びをいわせてくれたまえ」

バイスロイは戸惑って頭を振る。「友人、と言ってくれるのですか」

「ははは。そなたとて、私を友人と思うから訪ねてきてくれたのだろう？」

「ええ、まあ、あの兄妹の所業をだれかにぶちまけぬことには、腹の虫がおさまらなかつたものですから」

ふたりは顔を見合わせて、くすりと笑った。

「私は人を見る眼には自信があるのだよ。たとえ、きみの名が偽名でも、本当は芸術家でなくても、そんなことはどうでもいいのだ。このおひとは信頼するに値すると、直感がささやくのだな。そうだ、そういうひとがもうひとりいる。あいにく、なかなか打ち解けてもらえなくて、寂しい思いをしている」

「……女性ですか？」

「いや、少年だ。きみに紹介しただろう、彼だよ」

#### 456.

バイスロイは思わず椅子の上でがばと身を起こした。「あの彼！？」

「うむ、光の矢という、美しい名を持つ少年だ。たとえ、彼が何者であっても、本当の彼は信頼するに値すると感じるものがあるのだよ。きみへの気持ちといっしょだ」

「彼が……何者であっても……？」

レガリオは余計なことを言ってしまったというような顔で、少し微笑み、黙ってしまった。

「貴方は、ご存知なのですね？」

腰を浮かせかけるバイスロイにレガリオは笑顔を向け、「むろん、知ってる。だがね、バイスロイ、国家機密なのだよ」、と、両手を開いておどけて見せた。

第二十九章 『ベレオーサ市の惨劇』

第三十章へ続く

## 第二十九章のあとがき

今回表紙のピラミッドはウタトランのトヒル神殿。F・キャザーウッド(1799-1854)画。メッサナはテオティワカンモデルにしてるので、太陽の神殿とか月の神殿を、と試してみたものの、スケールが大きすぎて。下から見上げるとほんとに階段しか見えないらしい。で、トヒル神殿をお借りして来ました。

何気なく借りてきたのですが、『ポポル・ヴフ』によるとトヒルって黒曜石のことで、キチェ族の主神で、トヒル神は人間に生贄を要求し、この神殿で儀式が行われたのだそう。なんだか当たらずとも遠からじでしたか。

話は次第にヘビーになっていきそうで…それにしても今回は危機一髪でした！ あの、コモラさんがね。

2023年12月7日 記

## back number

### 第一部

#### 『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

#### 『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

#### 『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

#### 『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

### 第二部

#### 『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

## 『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

## 『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

## 『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

## 『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

## 『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

### 第三部

#### 『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

#### 『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

#### 『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

#### 『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

### 『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

## 第四部

### 『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起これ、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

### 『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。



## 『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

## 『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

## 第五部

## 『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

## 『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

## 『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。  
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

### 『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

### 『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうてい辿り着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

### 『第二十五章 イリチャの行方』

ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチャは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチャだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチャは激しく落胆する。

## 第六部

### 『ジャガー狩り』

ミクトランで行われていた巨人族製造はある人物の一声で打ち切られた。ミクトランは冥界から切り離され、ダーヴェたち三名はイリチャの懇願により地上のメッサナへと送られた。巨人族の危機が無くなり、ミクトランを脱出できたことよりも、その急転直下の転換ぶりに三名は戸惑う。なによりイリチャが謎の人物に連れ去られてしまった。彼らは敗北感と無力感とに苛まれる。

メッサナの前の提督パンテオラを飼い主としていたジャガーのバラムとバラケもあるじを失った現実と直面し、失調し始める。そんな折、メッサナ中のジャガーがすべて集められ、くにが管理するという通達が発表された。

### 『第二十七章 仮面の神』

黄金門の後継者バイスロイは身分を隠したままメッサナの街中に出、メルノの生家跡でアンベレオの女先遣隊長シパドと出会う。バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受けたシパドは、彼に記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。ヒューダーたちは出かけたまま戻らないバイスロイを心配するが…

メッサナ市奪還に湧き返る王都だったが、王場内には緊張が走っていた。アンベレオが信奉する神が、その代理人を送り込んできたのだ。そして記念硬貨に彫られるべき人物は、国王から神の代理人へと変更になった。

バイスロイはモデルである神の代理人と対面する。

### 『第二十八章 9かける3番目の王国』

メッサナ市奪還記念硬貨に刻まれる人物とはイリチャだった。かつてメルノが歌った歌を耳にして動揺するイリチャだったが、かえってバイスロイに対して心を閉ざしてしまう。

モデルのデッサンを携えてメッサナに戻ったバイスロイは、女先遣隊長シパドが新たな総督として就任することを知る。シパドは本来彼女のベレオーサ家のものだった土地を取り返し、治めることを当然と考えていた。そして二日後の就任式の折り、バイスロイに夫として、隣に立つよう求めるのだった。

古い昔話『9かける3番目の王国物語』には王と別れた后が特徴のある指輪を持っていたことが描かれている。それと同一と思われる指輪を持って現れたイリチャ。彼が金貨に刻まれたことはいったい何を意味するのか。

## 奥付

Salamander in the circle

第二十九章 ベレオーサ市の惨劇

2023年12月15日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) F・キャザーウッド

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---